

2010年12月18日

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
研究科名 人間科学研究科
申請者氏名 谷川章雄
学位の種類 博士(人間科学)
論文題目 江戸の墓制・葬制の考古学的研究
論文審査員 主査 早稲田大学教授 蔵持不三也 博士(人間科学)(早稲田大学)
副査 早稲田大学教授 菊池徹夫 文学博士(早稲田大学)
副査 早稲田大学教授 鳥越皓之 文学博士(筑波大学)
副査 早稲田大学教授 店田廣文 博士(人間科学)(早稲田大学)

本論内容

本論文は題目にある江戸の墓制と葬制を、申請者(以下著者と記す)が長きにわたって主導的にたずさわってきた近世考古学の発掘と出土遺物・遺構の調査に基づいて考察したものである。

400字詰め原稿用紙で600枚近い分量からなる本論文は、序章を除いて3部10章から構成されている。著者はまず序章「近世考古学と墓制・葬制研究」において、近世考古学の成立史を通観し、さらに近世考古学と歴史学および民俗学との学問的かかわりと方法論的差異を、先行研究を参照しながら論じている。そこで申請者はこれら隣接学問との協同作業の重要性を重視しつつも、歴史学が「変化・変容から日常へ」向かうのに対し、考古学は「日常から変化・変容へ」向かうという学問的特性を指摘し、考古資料と文献資料の調査が共通の課題をもって行われるには、「時間」と「空間」の認識を共有することが前提となるとする。この指摘は畢竟「資料」をいかに扱うかというこの2学問の方法論的差異へと収斂していくが、遺構を含む「モノ」から歴史相や生活相を再構築しようとする具体の科学としての考古学のありようと、なにほどこ抽象化された「文献」から過去を再構築しようとする歴史学のありようとを端的に語る言説としてある。こうしたモノと時間軸に関する志向は民俗学と考古学とを隔てる特徴でもあり、民俗資料を通して民俗の変遷と共時相を探求する民俗学に対し、考古学はその資料の年代的意味や背景を明確にすると指摘している。

序章ではまた、考古学がこれまで近世をその研究対象から省いてきたとした上で、本論文の主題である墓制・葬制に触れ、伝統的な歴史学が資料的な制約もあって近世のこうした主題にさほど関心を向けず、民俗学もまた、両墓性などに関する研究蓄積はあるものの、

そのフィールドは主に村落であり、近世都市の墓制・葬制を学問的な対象としてこなかったと指摘する。つまり、本論文の主題はまさに従来の歴史学や民俗学、そして考古学がほとんど関心を向けなかったいわば「空白の領域」であり、本研究の独創性や重要性は、本論文で開陳されている著者自身による数多くの発掘報告ともども、まさにそこにあるといえる。

以上の序章を言挙げとして、「考古学からみた江戸の墓制」と題した本論第Ⅰ部に入る。その第1章「身分・階層の表徴としての墓」で、著者は新宿区自證院での発掘事例などに基づきつつ、石槨石室墓から甕棺墓へといった埋葬施設の構造的分類・序列と被葬者との関連に着目し、埋葬施設の構造が被葬者の身分・階層をほぼ対応関係にあることを確証している。さらに自證院のほかに、寛永寺護国院や天徳寺浄品院など、都内数箇所の格式や規模を異にする寺院の発掘から、同様の対応関係を析出すると同時に、「同じ寺院の墓地の中でも墓域ごとに埋葬施設のあり方の違い」がみられると指摘する。そして、これら埋葬施設の構造的変容をモデル化し、それを通して、近世都市江戸の墓制の変遷上の画期が17世紀後葉と18世紀前葉にあったとする、まことに刮目すべき重要な指摘を行っている。將軍と大名の墓制の秩序が寛永年間に先行して確立し、その後、身分的・階層的な「下降」を経て、17世紀後葉に旗本を初めとする幕臣たちの墓制の秩序が成立したとするのである。

続く第2章「火葬と土葬」でも、著者は、前記寺院や都立一橋高校、八丁堀三丁目、池之端七軒町などでの発掘から、江戸の火葬と土葬の比率を統計的・編年的に抉り出し、寺院と火葬場、さらには火葬蔵骨器などとの関連に触れながら、17世紀の墓地である程度の比率を占めていた火葬が、18世紀以降に減少し、次第に土葬が主体となっていく変移を明示している。そして、この火葬の減少時期が、前記の17世紀後葉から18世紀前葉と符合していることに着目するとともに、そこに江戸の火葬場の廃止・移転と同時に、儒葬や神葬祭などの影響の可能性をも想定しながら、こうした変容のうちに、土葬の將軍墓を頂点として、「江戸の墓が身分・階層の表徴として秩序化していく過程のひとつだった」と結論づけるのである。

第3章の「胞衣納めと乳幼児の葬法」では、著者は、伊勢流や小笠原流などの武家故実にも則った將軍家や大名家などの胞衣納めの習俗が、育児書の普及時期でもある18世紀前葉から中葉にかけて、下級武士や庶民階層にまで広がった事実を、民俗学的な知見も引用しつつ、胞衣埋納遺構の発掘事例から明らかにしている。著者によれば、こうした変化は胞衣桶から一般的なかわらけの利用という埋納容器の変化にみてとれるという。さらに著者は、この変化と軌を一にして乳幼児の葬法に火消壺転用棺が用いられるようになったことにも注目し、こうした事実から、近世の子供に対する眼差しのないし育児観の変容を指摘する。

本論文第Ⅱ部「考古学からみた江戸の葬制」の第1章「副葬品の様相」は、個人の所有物を副葬する風が江戸時代に普及したとする近世史家塚本学の所説を受けて、まず將軍墓や大名墓の副葬品が17世紀には武器・武具が主体だったのに対し、18世紀にはその傾向

が減少すること、そして18世紀以降には、身分や階層を反映する副葬品がみられるようになり、中小寺院の墓の副葬品にも、煙管や多少とも宗教性を帯びた数珠、櫛、扇子といった個人の持ち物を副葬する習俗が顕著となると指摘する。筆者はこうした副葬品の変遷のうち個人意識の表象をみているが、この指摘はフランスに興り、歴史学を革新したアナール派（新しい歴史学派）の方向性と過不足なく通底するものといえる。

第2章の「六道銭の習俗」もまた副葬習俗にかかわるものである。ここでもまた、著者は自ら手がけた江戸18箇所が発掘データから、渡来銭や古寛永銭、新寛永銭、鉄銭などの銭種の組み合わせを統計的かつ年代的に分析し、かつて盛んであった六道銭習俗が18世紀中葉を境として、とくに格式の高い大名墓や高禄旗本および低禄旗本の墓と考えられる薬棺墓で明確に衰退しているとする。そして、その背景として、六道銭禁令（1742年）に表象される儒教などに起因する経済思想の影響をみる。つまり、この論理が「伝統的な死者供養の論理」と対立しながら、六道銭の習俗衰退を招いたとするのである。

「墓誌の変遷」と題した第3章では、わが国における墓誌研究は古代が中心であり、大脇潔の『日本歴史考古学を学ぶ』（1986年）や石田肇の「江戸時代の墓誌」（2007年）といった近年の研究まで、近世の墓誌についてはほとんど語られることがなかったと指摘した上で、江戸の墓誌を分類し、将軍・大名家の墓誌は、「17世紀代の火葬墓である在銘蔵骨器を中心とした様相から、遅くとも18世紀前葉以降の土葬墓にともなう墓誌を主体とする様相に変化していった」とする。著者はそこに仏教から儒教へと向かう宗教的・思想的背景をみているが、さらに18世紀後葉以降になると、墓誌は幕臣や藩士などにも普及していく。そこでは没年月日や姓名を記した簡素な墓誌も登場する。こうした墓誌は、おそらく被葬者個人の「人格」を示すものとして受け容れられたのではないかと著者はそう推測している。

第4章「木製卒塔婆と墓地景観」でもまた、著者は卒塔婆の形状やそこに書かれた墨書などを分類・分析し、江戸初期の墓地では、長い板塔婆などの木製卒塔婆が林立する中に、数少ない石製墓標が点在するという景観がみられたとする。しかし、18世紀初頭からは石製墓標が増加して墓地景観が大きく変貌し、木製卒塔婆は一部墓標として立てられたが、一般には忌日供養のために造立されるようになったという。著者はまた、埋葬人骨と墓標の関係についても分析し、たとえば新宿の發昌寺のように、遺体の正面を墓道に向けて埋葬していたと思える墓地では、墓参者が遺体とその上に立てられた墓標と相対することになっていたはずだと推測している。

こうした墓標研究は、さらに第III部「江戸および周辺村落の近世墓標」においてさらなる展開をとげる。まず第1章の「江戸および周辺村落の墓標の変遷」では、墓標を近世墓の墓上施設とする考古学的研究と、両墓制の民俗慣行から墓標をとらえる民俗学的研究の協同作業の必要性を論じたあと、著者は江戸および周辺地域の墓標を分析して、墓標が頭部かまぼこ形から方柱形へと時代的な変遷を遂げ、墓標に刻まれる被葬者の数も増えていったとする。この変容の背景に、著者は中世的な個人の追善供養から近代的な家を単位と

する供養へという観念の変化を読み取っている。また、墓標の広域的な斉一性にも着目し、こうした死者供養の変化がほぼ 18 世紀に行われるようになったとも指摘する。

第 2 章「近世墓標の変遷と家意識」は、千葉縣市原市での調査データをもとに、墓標と家意識との関連を、墓標の形状分類や被葬者数、さらに慶長年間から明治初期までの戒名の変遷などの分析から追究したもので、それによれば、各家で墓標の造立が普及し、従来の一観面の墓標が多観面にとって代わられるようになると、院号居士や大姉といった上位の戒名をもてない家では、夫婦や兄弟姉妹、親子などをまとめて 1 基の墓標に祀ることが多くなるという。その背景として、著者は経済的な理由のみならず、強い家意識のあらわれを想定している。

第 3 章の「近世墓標の普及の様相」では、伊豆七島利島の長久寺墓地の調査や、佐渡鷺崎の観音寺墓地の事例も参照しながら、墓標の年代別造立数や形状の分析を行い、近世墓標の普及には、航路や街道などの交通路に沿った都市から村へと向かう地理的要因や地域の経済的要因、知行地の歴史的要因などに加えて、寺院ないし寺墓、寺檀制との関連も考慮しなければならないとする。

終章「江戸の墓制・葬制の変遷とその背景」において、著者は改めて江戸の墓制や葬制の特徴に関する以上の論点や考察をまとめているが、とくにそこでは埋葬施設の構造がバラエティーに富んでおり、こうした構造が、被葬者の身分・階層とほぼ対応すること、そしてその変遷の画期が 17 世紀後葉と 18 世紀前葉にあったこと、さらにこの画期にほぼ対応して、葬送観や家・個人意識のあり方が変化していったことなどが指摘されている。

なお、本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は以下の通りである。

- (1) 谷川章雄「近世墓標の類型」、『考古学ジャーナル』288、ニューサイエンス社、26～30 頁（1988）
- (2) 谷川章雄「近世墓標の変遷と家意識 - 千葉縣市原市高滝・養老地区の近世墓標の再検討 - 」、『史観』121、早稲田大学史学会、2～16 頁（1989）
- (3) 谷川章雄「考古学からみた近世都市江戸」、『史潮』新 32、歴史学会、25～45 頁（1993）
- (4) 谷川章雄「長久寺の墓標」、『利島村史 研究・資料編』、利島村、219～233 頁（1996）
- (5) 谷川章雄「仏教考古学の世界」、『日本の仏教』5、法蔵館、121～131 頁（1996）
- (6) 谷川章雄「江戸の火葬墓」、『歴史と建築のあいだ』、古今書院、367～375 頁（2001）
- (7) 谷川章雄「江戸の袍衣納めと乳幼児の葬法」、『母性と父性の人間科学』、コロナ社、85～105 頁（2001）
- (8) 谷川章雄「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」、『墓と埋葬と江戸時代』、吉川弘文館、224～250 頁（2004）
- (9) 谷川章雄「江戸の六道銭」、『六道銭の世界』、高志書院、109～130 頁（2009）

評価

以上、縷々みてきたように、本論文は主題である江戸の墓制と葬制を多角的に追究した

ものであり、その緻密にして周到な方法論の開陳ともども、著者が主導してきた江戸近世考古学のいわば総決算としての意義と重みを有する。本論文における画期的かつ重要な発見は数多いが、わけても江戸の墓制や葬制の多様性を析出するだけでなく、その画期を17世紀後葉と18世紀前葉に見出し、その背景に社会的要因の変化を求めた考察は特筆に値する。歴史学や民俗学、社会史など、隣接学問の成果に目を向けることをいささかも怠らず、先行研究の学問的瑕疵を補い、あくまでもいちいちの、そして膨大な発掘データに基づきながら、仮説・推論を実証的かつ丹念に裏打ちしていく論述は、その簡潔にして要を得た文体にも支えられて、ときにボレミックな様相を帯びているとはいえ、示唆と説得力にきわめて富むものであり、今後の近世考古学のさらなる発展に寄与するところ大なるものがあるといえる。そこには、斯界の第一人者と目される著者のまさに面目躍如たるものがあるが、本論文を契機として、埋葬慣行近世史や民俗史、社会史などの隣接領域における学問的展開も期待できる。

以上のことに鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認めるものである。

以上